

No.85
地学 ソロバン玉石

写真1 ソロバン玉石 産地人吉市東大塚町 スケール2cm

人吉市には、岩盤にソロバン玉の形をした珍しい石が入っている場所があります。風化によって岩盤から取り出された石は、その形からソロバン玉石と呼ばれています。鹿児島県との県境に近い人吉市

東大塚町桑木津留^{くわのきづる}の集落を流れる桑木津留川の河床で採取できます。

ソロバン玉石は、玉髓^{ぎよくすい}を主体とした石です。玉髓は中国では玉と言われ、王の象徴として帯留めや印などに用いられた鉱物で、顕微鏡下でしか見えないくらい微細な石英(SiO₂)の結晶が集合してかたまりになった鉱物です。ソロバン玉石は、火成岩中にできた両円錐状の割れ目にケイ酸分が沈殿して形成されたものと考えられています。

ソロバン玉石を切った断面は、切り株を上から見たような同心円状の筋がいくつも見られます(写真1)。中には、中心が空洞で、その空洞内には石英の結晶(水晶)が見られるソロバン玉石もあります。

桑木津留川周辺には、安山岩が熱水の影響を受けて変質した白っぽい岩盤が分布しています。この岩盤の中には、ソロバン玉石のほかに、大小の丸い玉状のものや色々な形のかたまりなどがありますが、それらはソロバン玉の形にならなかった玉髓です。大きな玉髓の断面を見ると、ソロバン玉石と同じように、同心円状の筋や、中心の空洞になった部分には小さな石英の結晶(水晶)の集まりが見られます(写真2)。

ソロバン玉石は、大きなものでは直径5cm近くあり、周囲の岩石が変質して軟らかくなっていれば、ソロバン玉の形をうまく取り出すことができます。しかし、最近では形の良いものはあまり採れなくなっています。(廣田志乃)



写真2 ソロバン玉石とは別の形の玉髓の断面 産地人吉市東大塚町 スケール2cm



熊本県企画振興部
地域・文化振興局文化企画課
松橋収蔵庫

〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302
museum_project@kke.biglobe.ne.jp

◆定期購読のご案内(年間4回発行)◆

最新号及びバックナンバーを熊本県庁ホームページ(トップページ→組織で探す→企画振興部文化企画課)に掲載しています。是非ご購読ください。

編集・発行
熊本県企画振興部
地域・文化振興局文化企画課
熊本市水前寺6-18-1
Tel 096-333-2155
2011年7月15日

熊本の自然と文化
松橋収蔵庫だより

No.16
VOL.5-1

◇「ふしぎな鉱物の世界」に続き、「水辺の生き物」展を開催中です。松橋収蔵庫へ是非ご来場ください。

熊本県文化企画課 松橋収蔵庫
平成23年度第1回企画展示

水辺の生き物

身近で不思議な水辺の住人たちに会いに行こう!!

私たちの住んでいる熊本県は、全国でも有数の水に恵まれた県です。湧水地から海岸まで様々な水辺があり、そこには多様な生き物たちが暮らしています。

水の豊富な場所には、自然と多くの生き物たちが集まってきます。私たち人間も含め、生き物にとって水辺は生きるためには欠かせない大切な場所となっています。

本展示では、そんな水辺で生きる生き物たちの多様さを、川や溜池などの淡水を中心に紹介します。

本展示では、標本展示だけでなく様々な生き物の生体展示も行います。

普段はあまり見られない、生き物たちの水中生活をのぞいてみましょう。

平成23年 6月6日(月)～8月31日(水) ※日祝は休館
■時間：午前10:00～午後5:00
■場所：松橋収蔵庫

入場無料

キッズミュージアムのお知らせ

昆虫採集や、縄文土器づくり、化石レプリカ作りなど体験活動を通して、自然や歴史のおもしろさを学んでいきます。日程及びプログラムの詳細は、小学校や公民館へ配付する資料や県庁ホームページの「観光・文化・教育」から「生涯学習」をクリックしていただくことで確認できます。

日時 7月23日(土) 24日(日)
10:30～ 13:00～ 15:00～
各30分前より受付開始です
場所 松橋収蔵庫



縄文土器づくりに挑戦

「熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより」は熊本県ホームページからもご覧いただけます。

◇松橋収蔵庫の約62万点の収蔵資料の中から、各分野（歴史・民俗・植物・地学・動物）の資料を紹介しています。今回はNo.81～No.85です。

No.81 民俗 ざぐり座繰

座繰は繭から生糸をつむぐ道具です。この作業を糸繰りや糸取りなどといい、これを座って行えることからついた呼び名といわれます。明治以降、養蚕が盛んになるにつれ、県内にも普及したと考えられます。

写真の座繰は天草市有明町で明治35年から昭和初期まで使われていたものです。煮て糸をとりやすくした繭から、糸の端を引き出し数本をまとめ、座繰のハンドルを回して連動する歯車によって回転する糸枠に、この糸を巻き取っていきます。このとき、竹のへらも連動して左右に振り、糸を枠全体に均一に送ります。へらの下の鼓状の器具は糸に撚りをかけるものです。

この座繰の側面に「熊本市上通三丁目器械師 山下善十」という焼印があります。上通町には、現在、蚕糸会館がありますが、かつて一帯に蚕糸関係の機関や団体、会社などが集まった、熊本県における蚕業ゆかりの地です。そのため、当時は、製糸関連用具を作る腕の良い職人がたくさんいたのではないかと考えられます。（迫田久美子）



ザグリ 16×47×40cm

No.82 動物 クロツラヘラサギ *Platalea minor* サギ科

クロツラヘラサギは、写真の剥製からも分かる通り、嘴から顔面までが黒く“へら”のような嘴を持つ鳥です。”サギ”とついていますが、トキの仲間です。ちなみに、属名の *Platalea*（ヘラサギ属）はギリシャ語で“広い”という意味の *platys* に由来しており、種(小)名の *minor* は、ヘラサギ *Platalea leucorodia* と比べて体が“小さい”ことから付けられています。

ヘラサギ類は嘴を水にさし込み、左右に振り歩きながらカニや小魚など水中の小動物を捕らえますが、なかなか簡単ではなさそうです。

熊本県では主に冬鳥として、朝鮮半島から渡って来る個体を有明海や八代海の干潟などで見ることができます。しかし、世界で2000羽ほどしか生息しない希少な種です。さらに、飛来する場所も限られているため、熊本県の絶滅危惧IB類として選定されています（レッドデータブックくまもと2009）。熊本県の干潟は、国内の他の飛来地に比べて多くの個体が飛来する貴重な場所です。（免田隆大）



2010年1月23日に氷川河口で死亡したメスの個体

No.83 歴史 功七級金鷄勲章（天草市浜田家資料）

この資料は日露戦争での軍功を称えて贈られた、功七級金鷄勲章という勲章です。金鷄勲章は明治23年（1890）2月11日の紀元節に、武功拔群の軍人に贈られることが制定されました。勲章の階級は、軍人の階級により、功一級から功七級に分けられています。

デザインは級ごとに異なり、上級になるほど豪華なものになっています。添付の「證書」によると、叙勲者は陸軍歩兵一等卒で、卒の階級なので功七級の勲章を授章したことがわかります。

この勲章のモチーフの鳥は、「日本書紀」に記された説話によると、神武天皇が東征したときに光を放ち、敵の目を眩ませて神武天皇を助けた、という金鷄です。

この勲章は、日清戦争以後、アジア・太平洋戦争まで軍人に贈られましたが、終戦後に廃止されました。金鷄勲章は、他の勲章と異なり、唯一軍人のみに贈られた勲章です。当時の日本の一側面を知る上で貴重な資料といえるでしょう。（上崎武蔵）



功七級金鷄(きんし)勲章

No.84 植物 ホテイアオイ *Eichhornia crassipes* (Mart.) Solms-Laub.



写真1 ホテイアオイの花(左)と葉および基部のふくらみの断面(右)

ホテイアオイは熱帯アメリカ原産のミズアオイ科の水草で、明治中期（1900年頃）に移入されたとされています。地面や水底に根を張らず、水面に浮かんで生育する浮遊植物です。葉は丸く光沢があり、葉柄の一部のふくらんだ部分は中がスポンジ状になっていて、浮き袋の役目を果たしています（写真1右）。根は根毛が発達して鳥

の羽毛のように広がり、水から栄養を吸収します。また、細い枝を出して先端に子株を作ります。このような性質を持つホテイアオイは、1960年代になると大増殖をするようになりました。当時は水の富栄養化が進んでおり、そのことが大繁殖の原因の一つと考えられています。

写真の標本（写真2）は、1952年に宇城市不知火町で採集されたものです。ホテイアオイは、水位の低下などで水底に根を張り浮遊生活をしなくなると、この標本にみられるように葉柄がふくらまなくなります。この標本は、植物が環境に合わせて形を変え、たくみに生き抜く姿を記録しています。（前田哲弥）



写真2 基部のふくらみ(浮囊)が発達していないホテイアオイの標本

No. 94
民 俗 糸車

糸車は糸に関する様々な用途^{ようと}に用いられた道具です。木を組んだ台の一方に木製または竹製の大きな車^{くるま}が取り付けられ、反対側のツム^{ほうすい}（紡錘車）と調べ糸という糸で繋がられています。大きな車を一周させるとツムは約30回転します。この高速で回転するツムで糸を巻きとったり、糸を紡いだり、糸に撚^よりをかけたりします。例えば、機織^{つむ}りで使う緯糸^{はたお}は細い竹の管に巻いて杼^ひに取り付けますが、この管に巻き取るのに糸車が使われました。また、木綿^{もめん}から糸を作るときはツムの力で綿^{わた}の塊^{かたまり}から繊維^{せん}を少しずつ引き出して撚^よりをかけて糸にしました。蚕^{かい}の糸など細い糸を数本撚^より合わせて1本の糸にするのにも糸車を使いました。



糸 車



杼

写真の糸車は玉名郡長洲町^{ながすまち}で明治30年代から昭和40年頃まで使われていました。高さ82cm、車の直径76cm、台の横幅は60cmです。全体のバランスとして車が大きく、車とツムの距離^{よこはば}が短いのは九州・中国・四国地方で使われていた糸車の特徴です。東日本では車が木製でやや小さく、ツムとの距離^{きより}が長いものが多いようです。

写真の資料はイトグルマと呼ばれていましたが、県内ではほかにイトトリクルマ、イトヨリグルマ、イトマキキ、イトツムギ、イトヒキハタ、モメンバタ、イトクリ、クリバタなど十数種類の呼び名があります。

かつて、着るものは材料の入手から糸作り、機織^{つむ}り、仕立てまで全て自分たちの手で行っていました。糸車は糸作りや糸巻きなど織物^{すべ}作りに欠かせない大切な道具であり、「たぬきの糸車」など昔話にも多く登場する生活になじみ深い道具でもありました。長い間、大抵の家で使われていたため呼び名も多くあるのでしょう。しかし衣類^{いり}が作るものから買うものになった今日では、日常で見かけることはほとんどなくなりました。（迫田久美子）



熊本県企画振興部
地域・文化振興局文化企画課
松橋収蔵庫

〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302
museum_project@kke.biglobe.ne.jp

◆定期購読のご案内（年間4回発行）◆

最新号及びバックナンバーを熊本県庁ホームページ（トップページ→組織で探す→企画振興部文化企画課）に掲載しています。是非ご一読ください。

編集・発行
熊本県企画振興部
地域・文化振興局文化企画課
熊本市水前寺6-18-1
TEL 096-333-2155
2011年9月15日

熊本の自然と文化
松橋収蔵庫だより

No.17

VOL. 5-2

◇「水辺の生き物」にご来場いただきありがとうございました。引き続き「ちょっと昔の暮らし探検Ⅳ」展を開催中です。松橋収蔵庫へ、ぜひご来場ください。

平成23年度 文化企画課松橋収蔵庫第2回企画展

ちょっと昔の暮らし探検Ⅳ

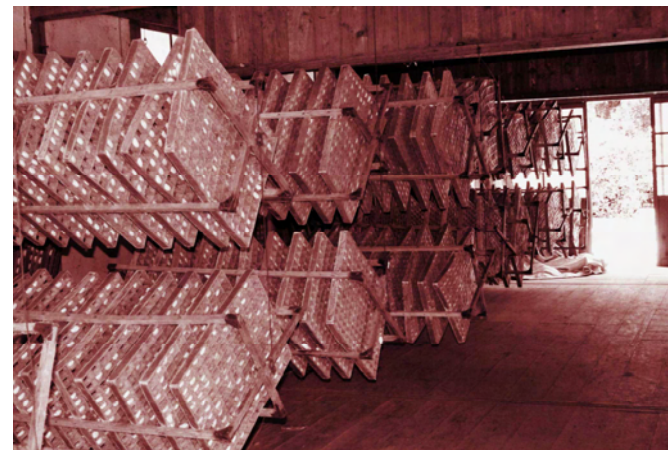
2011.09.12（月）～11.30（水） 10:00～17:00

（日曜祝日は休館です）

昭和30年代後半から40年代にかけての高度経済成長の下、機械化、電化、プラスチックなどの化学製品の普及により、日本人の暮らしは激変しました。

このように短期間で日々の暮らしが変化するということは、これまで日本人が経験したことがないものでした。4回目を迎える今回の展示では水道、電化製品、ガス製品が普及する以前の暮らしの道具、機械化が進む以前の農機具、漁具などのほか、養蚕や機織りの道具など約200点の昔の道具を展示します。

ちょっと昔ではあたりまえの暮らし、でも今の子どもたちには想像もできないような暮らしの様子を紹介します。大人も子どもも一緒に楽しんでいただければ幸いです。



バックヤードツアーのお知らせ

松橋収蔵庫には、県内外の方から寄贈いただいた資料が、約62万点ほど収蔵されています。日頃見ることのできない貴重な収蔵物を、松橋収蔵庫の専門職員が案内します。

日時 平成23年11月20日（日）
13:30～
展示見学も含め90分
定員 40名 受付 13:00より
集合場所 松橋収蔵庫1階ロビー

「熊本の自然と文化 松橋収蔵庫だより」は熊本県のホームページからもご覧いただけます。

◇松橋収蔵庫の約62万点の収蔵資料の中から、各分野（歴史・民俗・植物・地学・動物）の資料を紹介しています。今回はNo. 90～No. 94です。

No. 90 動物 オオルリ *Cyanoptila cyanomelana* スズメ目

オオルリは4月頃から日本に渡ってくる夏鳥です。熊本では10月頃まで山地の森林や溪流沿いの林で見ることができ、繁殖も確認されています。オオルリは鳴き声が美しい鳥として有名です。繁殖期のオスは高い木の梢などに留まり「ピーリーリー」と口笛のような高い声でさえずります。このさえずりが美しいことから、ウグイスやコマドリとともに「日本三鳴鳥」と呼ばれています。



オオルリ

写真の剥製は、2005年4月に熊本市の東稜高校で死亡していた若いオスの個体で、体長は約15cmです。オオルリは、その名の通り光沢のある美しい“るり色”の羽毛を持つ鳥ですが、これはオスに見られる特徴です。鮮やかなオスとは逆に、メスは茶褐色やオリーブ褐色といった地味な色をしています。オオルリやカワセミなど一部の鳥の羽毛の色は、羽毛にある細かい構造による複雑な光の反射により様々な色を発色しています。これを“構造色”と言い、剥製の状態でも写真のように色あせることなく美しい色を保つことができます。（免田隆大）

No. 91 歴史 明治三十七八年従軍記章〔天草市浜田家資料〕

本資料は、明治37～38年（1904～05）の日露戦争の従軍者に授与された従軍記章です。この記章の表面には、菊紋・桐臺紋・旭日旗の紋様が配されています。裏面には「明治卅七八年戦役」の文字が刻まれています。従軍記章は証書と共に授与されますが、本資料については証書がないので、誰に授与されたのかは不明です。

従軍記章は明治7年の台湾出兵に対して、明治8年に制定されたのが始まりです。これ以後の戦役・事変についてはその都度、勅令によって授与対象者や紋様が定められ、昭和20年の終戦までに9種作られました。従軍記章は軍功に対して授与するものではなかったため、要件を満たせば軍人以外の文官・民間人などの従軍者にも広く授与されました。また、従軍記章は基本的に当該戦争終結後に授与されるものなので、最後の「大東亜戦争従軍記章」は計画・生産されていましたが、その大半は破棄されました。このような従軍記章は近代日本が関わった戦争を知るうえで貴重な資料といえるでしょう。（上崎武蔵）



No. 92 植物 アレチハナガサ *Verbena brasiliensis* Vell. クマツヅラ科

アレチハナガサはクマツヅラ科の多年生草本です。茎の断面は四角形で、大きいものでは高さ2mにもなります。茎の先が枝分かちれて、たくさんの花穂が付きまします。花はとて小く、先が五つに分かれた花冠の直径は3mmくらいで、薄い紫色をしています。道ばたや空き地、河川敷などに生育し、大群落をつくることもあります（写真1）。



写真1. 河川敷に群落をつくるアレチハナガサ（濃い緑色の部分）とアレチハナガサの花（円内）

学名に“*brasiliensis*（ブラジルの）”とあるように南アメリカ原産の植物です。日本では、1960年代から神奈川県や福岡県での生育が確認されています。熊本県では、1969年発行の『熊本県植物誌』に「まだ確認されていない」と記載されています。写真の標本は、1973年に現在の熊本市河内町で採集されたもので、松橋収蔵庫に収蔵されているアレチハナガサの標本としては最も古いものです。この標本から、アレチハナガサは1969年から1973年の間に熊本県内に生育するようになったと推測できます。（前田哲弥）



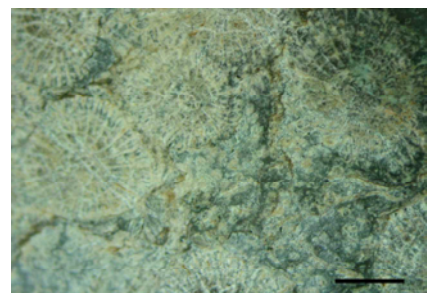
写真2. アレチハナガサの標本

No. 93 地学 四放サンゴと六放サンゴ

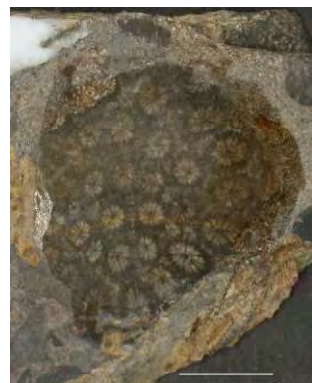
サンゴは古生代初期（約5億4200万年前）に出現し、現在まで生息しています。サンゴには1つの個体から成り立つ単体サンゴと多数の個体から成り立つ群体サンゴとがあり、群体サンゴは熱帯（亜熱帯）域の浅海でサンゴ礁を形成します。大昔の群体サンゴもサンゴ礁を形成していました。群体サンゴの化石が大量に産するとそこは昔のサンゴ礁だったことが分かります。

化石サンゴを観察すると、写真のように、どちらとも各個体の壁から中心に向かって隔壁が延びているのが分かります。六放サンゴの隔壁が全て中心に向かってのに対し、四放サンゴは左右対称だけど中心に向かっていない隔壁があるという違いがあります。四放サンゴは四射サンゴとも呼ばれ、古生代オルドビス紀からペルム紀末（約4億8800万年～約2億5100万年前）の古い時代の地層からしか発見されていません。六放サンゴは六射サンゴとも呼ばれ、中生代三畳紀（約2億5100万年前～）以降の地層に見られます。

サンゴの化石は、地層がつくられた時代と環境を知る手がかりとして利用されています。（廣田志乃）



四放サンゴ（古生代ペルム紀後期（約2億6000万～2億5100万年前）採取地：八代市東陽町河俣（スケール0.5cm））



六放サンゴ（中生代ジュラ紀後期（約1億6100万～1億4600万年前）採取地：八代市赤松町鷹河内（スケール1cm））

No. 99 ミサゴ *Pandion haliaetus* タカ目
動物



写真1 ミサゴの剥製標本

ミサゴは、日本全国のダム湖や海岸、大きな河川などの水辺で見ることができる大型の猛禽類です。嘴の先から尾羽の先まで約60cm、翼を広げるとその幅は約160cmにもなります。写真1の剥製は、2002年8月に天草郡天草町（現天草市）にて死亡した個体です。

ミサゴが水辺で見られる理由としては、猛禽類の中でも珍しく魚類を主食としていることが挙げられます。彼らは魚類を狩るため、他のタカ類とは異なった特徴を持っています。まず、大きさの近いトビ（写真3）と比べてみると、ミサゴの脚（写真2）が太いことが分かります。ミサゴは、嘴で魚を捕らえるカワセミなどと違って脚で魚を捕まえるため、脚が太いことにより、水中へ飛び込んで魚を狩る際の衝撃に耐えられます。また、爪がトビよりも長く鋭くなっています。さらに趾の裏には角質の細かい棘が無数に備わっており、これが滑り止めのようににはたきます。これらの特徴により、滑りやすい魚をしっかりと捕らえることができます。（免田隆大）



写真2 ミサゴの脚



写真3 トビの脚



熊本県企画振興部
地域・文化振興局文化企画課
松橋収蔵庫

〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302
museum_project@kke.biglobe.ne.jp

◆定期購読のご案内（年間4回発行）◆

最新号及びバックナンバーを熊本県庁ホームページ（トップページ→組織で探す→企画振興部文化企画課）に掲載しています。是非ご購読ください。

編集・発行
熊本県企画振興部
地域・文化振興局文化企画課
熊本市水前寺6-18-1
TEL 096-333-2155
2011年12月15日

熊本の自然と文化
松橋収蔵庫だより

No.18
VOL. 5-3

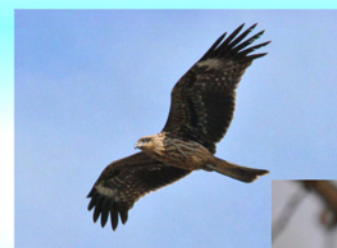
◇「ちょっと昔の暮らし探検Ⅳ」にご来場いただきありがとうございました。次回は「野鳥の楽しみいろいろ」展が開催されます。松橋収蔵庫へ、ぜひご来場ください。

平成23年度 文化企画課松橋収蔵庫第3回企画展

鳥の楽しみいろいろ

2012.1.4（水）～2012.2.29（水）10:00～17:00

（日曜祝日は休館です）



鳥は高く空を飛んだり、すぐに物影に隠れたりするためじっくりと観察することが難しい動物です。しかし、鳥は人間にとって古くから馴染みのある動物でありました。私たちは、野外で鳥を観察したり、写真に撮ったり、鳴き声を愛でたり、時には彫刻や絵画の題材にしたりと、さまざまな方法で鳥に親しんできました。

訪れる場所や季節が違えば見られる鳥たちも変わってきます。私たちは、さまざまな鳥たちの様子にそれぞれの魅力を見出してきました。長い歴史の中で、国や地方を問わず、あらゆる場所で鳥たちは私たちの近くに存在してきたのです。

本展示では、写真や映像、切手や造形といった鳥にまつわるものを使って、野外観察とは一味違った角度から見た鳥たちの魅力を伝えます。あなたがまだ体験したことのない、今まで気が付かなかった鳥たちの魅力を探してみませんか？

本展示期間中に、野鳥の観察会も予定しております。詳しくは文化企画課へお問い合わせ下さい。



「くまもと自然と文化の学芸員養成講座」公開講演会がありました

11月24日（木）に、くまもと県民交流会館パレアで滋賀県立琵琶湖博物館の前館長、川那部浩哉先生をお招きして、「県民参加の博物館活動～琵琶湖博物館の”はしかけ”について」という演題で講演会を行いました。

人間と自然との共生、自然と人との関わりをつないでいく博物館の役割、琵琶湖博物館での県民の自主的な取り組みなどを琵琶湖博物館が立ち上がる前からの活動などを含め具体的に示しながらのお話をいただきました。

会場からの質問にも気軽に答えていただきました。



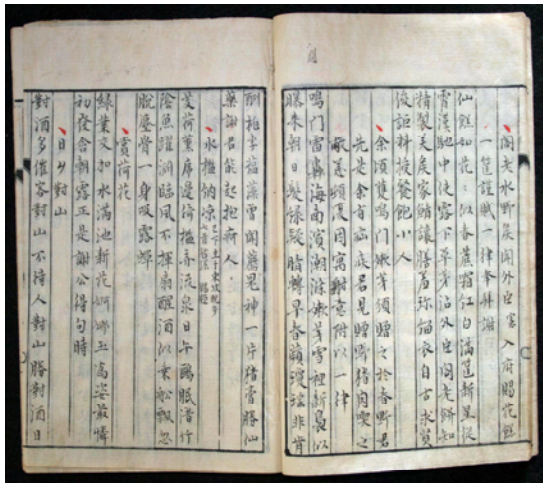
No. 95
歴史

辛島家資料「丑卯東遊稿」

「丑卯東遊稿」は、熊本藩の藩校時習館で教授を務めていた辛島才蔵（塩井）が江戸出府の際、道中の様子や江戸での生活を漢文体で記した日記です。才蔵はこれ以前に江戸に4回出府しており、江戸では儒学者で「寛政の三博士」と呼ばれた柴野栗山・尾藤二洲・岡田寒泉や古賀精里、絵師の谷文晁などと交流がありました。

資料によると、今回の江戸行きは、文政12年（1829）3月28日に熊本を出発し、海路瀬戸内海を渡って大坂に入り、そこから東海道を通り江戸に向かい、5月30日に到着しました。道中では厳島神社などを訪れ、感想を漢詩で記しています。江戸に到着してからは8代藩主細川斉茲に「中庸」を講釈したり、上述の知己と交流を深めていたようです。才蔵が在府中であることを伝え知った老中水野忠邦から花餅を貰ったことも記されています。江戸には約10ヶ月間滞在し、天保元年（1830）閏3月26日に帰熊しています。

この日記には、江戸滞在中の日々の生活を詳しく記録してあるため、才蔵の江戸での交流関係の広さを知ることが出来ます。（上崎武蔵）



辛島家資料「丑卯東遊稿」

No. 96
植物ワルナスビ *Solanum carolinense* L. （ナス科）

ナス科はジャガイモ、トマト、ピーマン、トウガラシ、ナス、ホオズキ、タバコなど、わたしたち人間にとって身近な種を多く含むグループです。世界の温帯から熱帯にかけて広く分布し、これらの有用な植物もふくめて約2000種が知られています。ワルナスビは北アメリカ原産のナス科植物で、世界の各地に外来種として定着しています。日本では明治時代に千葉県で発見され、現在では日本全国に広がっています。直径2cmほどの小さい花をつけ、その後1.5cmほどの黄色い実をつけます。茎や葉にはたくさんの刺があり、動物からの食害を防いでいると考えられます。

地下茎でよく増えるため、一度侵入すると駆除は難しいことから、ワルナスビ（悪茄子）と命名されました。たくさんの刺や、地下茎での繁殖はワルナスビの懸命な生存戦略ですが、そのため人の手に負えない畑地の問題雑草とされてしまいました。

熊本県に入ってきた時期は定かではなく、『熊本県植物誌』（1969）でも確認されていません。写真の標本は、1961年に熊本市で採集されたものです。松橋収蔵庫にあるワルナスビの標本としては最も古いものです。（前田哲弥）



ワルナスビの標本



ワルナスビの花

No. 97
地学

褐鉄鉱（リモナイト）

阿蘇カルデラ北半分の阿蘇谷には、日本では数少ない、褐鉄鉱（リモナイト）を採掘している鉱山があります。褐鉄鉱は針鉄鉱（FeO(OH)）を主体とした鉄鉱物の微細粒～土状の集合体です。阿蘇市狩尾には、厚さ30cmの表土の下に



写真1 ヨシの化石を含む褐鉄鉱（リモナイト） 写真スケールは2cm

1～2mの厚さの褐鉄鉱の層があります。また、赤水から本塚付近の水田地帯の地下にも埋蔵されています。

現地で採取される褐鉄鉱は、多孔質で砕けやすく、ヨシの化石を多く含んでいます（写真1）。このことから、褐鉄鉱が堆積した当時は沼地で、地下から湧いてきた温泉水中の鉄イオンが水と酸素に反応して水酸化鉄となり沈殿したと考えられます。このように、沼地などで沈殿してできた褐鉄鉱は沼鉄鉱とも呼ばれています。

褐鉄鉱は昔から人々に利用されてきました。阿蘇地方の古墳からは、褐鉄鉱を焼いてできる赤色の顔料「ベンガラ」が大量に出てきます。また、戦時中は鉄鉱石として採掘していました。現在は、飼料添加物や土壌改良活性土、下水処理場の脱硫剤などに用いられています。（廣田志乃）



写真2 褐鉄鉱を加工して作ったペレット

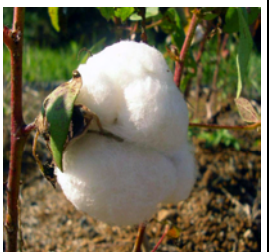
写真スケールは2cm

No. 98
民俗

実繰（さねくり）

実繰は綿花から種を取り除く道具です。熊本県ではワタクリ、ワタクリキなどと呼ばれています。綿花とはワタ（アオイ科ワタ属）の実が熟して弾けると現れる、花のように見える白い繊維です。私たちの衣服などに用いられる木綿はこの繊維から作られています。綿花の中には小さな黒い種がいくつも入っていますが、繊維と強く結びついているため、手で種を引きはがすのは大変です。それで実繰のような道具が発明されました。

中央の丸い二本の棒の間に綿花を挟みハンドルを回して回転させると、繊維が先に送られ、種は手前に落ちる仕組みになっています。かつて農家では畑でワタを栽培し、そこから糸を紡ぎ、機を織って自分たちの着物を作っていました。一般的な体格の大人の着物に必要な一反（約36cm×10～13m）の布を織るのに何百個もの綿花から種を取り除いて糸にする必要がありました。（迫田久美子）

ワタクリキ 球磨郡山江村山田
昭和10年代使用 51.5×30×28cm

綿花

No. 104
歴史

熊本市辛島家資料「集古十種 名物古画」

「集古十種」は、寛政の改革を行った江戸幕府の元老中で古物愛好家であった松平定信が、儒者の柴野栗山らに編集を命じ、絵師の谷文晁らに書写させた、古書画・古器物・古武具類の実測原寸図に縮尺図を加えた木版図集です。内容は、碑銘部、兵器部、古書画部など10種類からなり、全部で85冊あります。その初版は寛政12年（1800）に作られました。

本資料は、古書画部の「名物古画」という題目で、31点の古書画が記載されており、書画の脇には、当時の所有者名、作者名及び原寸が記されています。ちなみに、写真1は中国の陳所翁（陳容）作の「龍図」で、当時の所有者名は「京師大徳寺龍光院」とあるので、京都大徳寺の龍光院であったことがわかります。このほか雪舟作の水墨画なども収録されています。このように、1点ごとに作者名、所有者名、原寸が記載されていることから、古文化財の図録ともいえます。

また、本資料は木箱に収納されており、上蓋の裏には写真2のように箱書きがあり、ここから「前閣老白川少将楽翁老侯」（松平定信）から賜った品であるということがわかります。また、この箱書きは、辛島憲（塩井）が「文化戊寅之人日」（1818年1月7日）付で記しています。

辛島塩井は、幕府の命により、松平定信が江戸湯島に開いた昌平坂学問所で講釈を行っただけでなく、このほかにも数回江戸に出府し、谷文晁らと親交があったため、この箱書きの信憑性は高いと思われます。全部で85冊ある「集古十種」のうち、この「名物古画」1冊だけが、どのような経緯で辛島塩井に渡ったのかということは非常に興味深いことなので、今後調査していこうと思っています。（上崎武蔵）



写真1



写真2



熊本県企画振興部
地域・文化振興局文化企画課

松橋収蔵庫

最新号及びバックナンバーを熊本県庁ホームページ（トップページ→組織で探す→企画振興部文化企画課）に掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524
熊本県宇城市松橋町豊福1695
TEL 0964-34-3301
FAX 0964-34-3302
museum_project@kke.biglobe.ne.jp

熊本の自然と文化
松橋収蔵庫だより

No.19

VOL. 5-4

◇松橋収蔵庫では、3月15日から5月31日まで「熊本の祈りと感謝-民俗写真家の眼差し-白石巖民俗写真展1」を開催。県内各地でのお祭りの様子などがご覧いただけます。是非ご来場ください。

平成23年度第4回企画展

熊本の祈りと感謝

—民俗写真家の眼差し—
白石巖民俗写真展1

開館時間10時より17時 日曜・祝日休館



芦原の地蔵祭り（熊本市）



古代楽（南関町）



甘酒祭り（宇土市）



鹿帰瀬の川祭り（熊本市）

クロツラヘラサギの観察会を行いました

2月12日（日）に、不知火海の砂川河口及び鏡川河口でクロツラヘラサギの観察会を行い約60名の参加がありました。

クロツラヘラサギは、世界で約2000羽しかいない希少な鳥で、そのうち100羽近くが有明海及び不知火海に飛来します。

当日は、天気も良く約30羽のクロツラヘラサギが観察されました。その他にも、ヘラサギ、ツクシガモ、アカアシシギなど30種近い鳥たちを見ることができ、不知火海の豊かな自然の一端に触れることができました。



No. 100
植 物スパルティナ・アルテルニフロラ *Spartia alterniflora* L. (イネ科)

スパルティナ・アルテルニフロラは、南北アメリカの東海岸を原産とするイネ科植物で、ヒガタアシとも呼ばれます。愛知県で2011年に確認されたのが、日本への最初の侵入と考えられています。河口の沿岸や洲などの塩性の湿地に生育する植物で、高さ2mにもなります。種子で増えるほか、地下茎を盛んにのばして大きな株をつくり、最終的には背が高く密な群落をつくります。そのため、在来植物の生育場所を奪うだけでなく、陸地化と草原化が進んで塩性湿地に生息するカニや貝にも大きな影響が出ることが予想されます。

2011年には、日本国内で2例目の侵入となる定着が熊本県で報告され、熊本市の白川と坪井川、宇城市の大野川の河口で生育が確認されました。写真の大野川の河口では、いくつもの株が大きな群落になりつつあり、数年前から侵入していた可能性があります。

写真の標本は、2011年11月に坪井川で採集された標本です。花も実の時期も過ぎていたために穂も落ちかけていますが、花を咲かせ種子をつくっていることがわかります。(前田哲弥)

No. 101
地 学オカダキリガイダマシ *Turritella okadai*

天草上島の千巖山には、貝化石の密集している露頭があります。化石の入っている岩石を観察すると、二枚貝や巻き貝がたくさん見られます。特に目に付く巻き貝がオカダキリガイダマシです。オカダキリガイダマシは、キリガイダマシの仲間で、新生代古第三紀始新世（約5580万～3390万年前）に生きていました。今は、化石だけが確認されています。

キリガイダマシの仲間は細長い塔の形をして巻きの数が多く、殻が薄いのが特徴です。写真1・2の巻き貝は、とても似ています。オカダキリガイダマシの化石(写真1)の表面には4本の筋があり、2本めの筋が特に発達しています。一方、現生のキリガイダマシ(写真2)の殻の表面には、同じ太さの筋が6本みられます。筋の形や太さ、本数で区別ができます。

キリガイダマシの仲間は中生代白亜紀（約1億4500万～6500万年前）から現在までいますが、時代によって筋の数や筋の太さが変わります。そのため、キリガイダマシの仲間の化石が採れると、その地層がいつ頃できたかを知ることができます。(廣田志乃)



写真1



写真2

スケールはいずれも2cm

No. 102
民 俗

針箱

裁縫道具を入れておく箱で、裁縫箱ともいいます。裁縫道具は、古くは桶、籠に紙を貼ったもの、木箱など身の回りの容れ物に納めていましたが、次第に引出しや仕切りの付いた専用の針箱が使われるようになりました。布がたるまないように引っ張る紵(くけだ)い台が付いたものもありました。

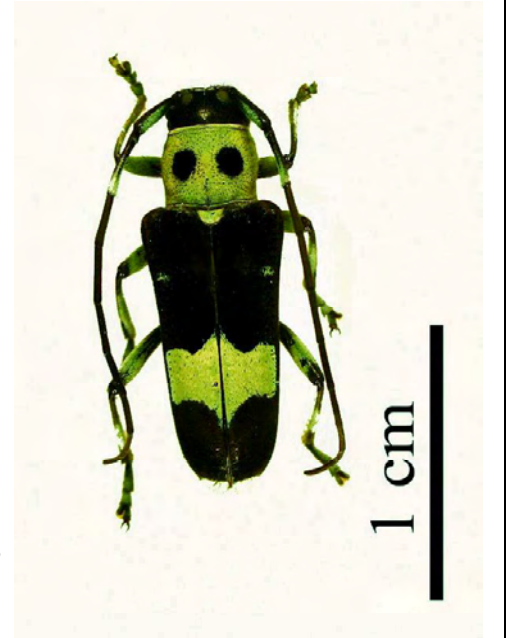
写真の針箱は、明治時代に嫁入り道具として作られたものです。朱塗りで豪華に仕上げられています。上部の蓋は蝶番で半分開くようになっていて、中に針山を置きます。下の引出しには、鋏(はさみ)やへら、指貫、糸巻などの小物を入れていました。

かつては、着るもののほとんどを手作りしていたので、裁縫は家事の重要な技術のひとつでした。そのため、針箱は嫁入り道具のひとつとされ、大切に扱われていました。八代地方では女の子の初節句(いっけんはごい)に一間羽子板という、約180cmもある大きな羽子板が贈られ、嫁入りする時に、これを針箱に作り直すという慣習がありました。(迫田久美子)

熊本市 明治時代～
19.6×32×26cmNo. 103
動 物ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* コウチュウ目

ラミーカミキリは、緑白色の体に特徴的な黒い斑点を持つ小型のカミキリムシです。写真の標本は、2006年6月に宇城市で採集された個体です。体長はおよそ14mmで、体長と同じくらいの長さの触角を持ちます。ラミーカミキリという名は、幼虫、成虫ともにイラクサ科のラミーを食草とすることに由来します。5月から8月の雑木林やその林縁では、成虫がカラムシやヤブマオなどのイラクサ科植物の葉を食べているのを見ることができます。

昆虫図鑑などでも紹介されているラミーカミキリですが、もともと日本には生息していなかった外来種です。本来の生息地はインドシナ半島から中国、台湾にかけてです。日本へは、1872年頃に輸入されたラミーとともに長崎県に入ったとされています。熊本県では、1971年に阿蘇で採集された記録があります。現在では、九州から関東までの広い範囲で見られるようになった本種ですが、温暖化の影響に伴い生息域をさらに北に拡大していると考えられています。(免田隆大)



1 cm

No. 109
植 物セイヨウヒキヨモギ *Parentucellia viscosa* (L.) Caruel. (ゴマノハグサ科)

セイヨウヒキヨモギは、ヨーロッパの西部や地中海沿岸を原産地とするゴマノハグサ科の一年草です。高さは40cmくらいになり、5～6月に黄色のくちびる形の花を咲かせます。全体に白い毛が生え、べたべたとした物質を出す腺毛^{せんもう}とよばれる毛も密生しています。このため、触るとごわごわとした感触があり、べたっと手にくっついてきます。

この植物は、自分で光合成をして栄養をつくる一方、他の植物の根からも栄養をもらう半寄生とよばれる生活をしています。宿主（寄生の相手）は、イネ科、イグサ科、カヤツリグサ科などの単子葉植物、ゴマノハグサ科、サクラソウ科、リンドウ科、オオバコ科、キク科などの双子葉植物と、幅広く様々なグループの植物に寄生し



ていることが分かっています。

日本に入ってきていることが明らかになったのは1973年のことで、千葉県船橋市の宅地造成地で初めて発見されました。その後、神奈川県、三重県、熊本県、福岡県などにも生育していることが分かりました。道ばたや堤防、ダム近くの斜面など、切り開かれて本来の植生がはぎ取られたような場所で生育するようです。

写真の標本は、1991年5月22日に山鹿市内の菊池川の堤防で採集されたものです。ラベルには、チガヤ（イネ科）やコマツナギ（マメ科）に混じって生育していたことが記録されています。このように、植物体だけでは分からない情報がラベルに記載されている標本は、自然の情報をよりたくさん記録した価値の高い資料であるといえます。（前田哲弥）



熊本県

松橋収蔵庫

HP アドレス

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/>

最新号及びバックナンバーは、熊本県松橋収蔵庫のホームページに掲載しています。是非ご覧ください。

〒869-0524

熊本県宇城市松橋町豊福1695

TEL 0964-34-3301

FAX 0964-34-3302

メールアドレス

shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp

熊本の自然と文化

松橋収蔵庫だより

No.20

VOL. 6-1

◇松橋収蔵庫では、6月15日（金）から8月31日（金）まで平成24年度第1回企画展示「くまもとの外来生物」を開催します。是非ご来館ください。

開館時間10時より17時 日曜・祝日休館

熊本県松橋収蔵庫 平成24年度第1回企画展示

くまもとの外来生物

人間が活動の範囲を広げてきたことに伴って、もともとその地域にいなかった生物が、身近に見られるようになりました。これらの生物は外来生物と呼ばれ、生態系や人間の生活に大きな影響を与えているといわれています。外来生物を通して、熊本の自然とは何か、考えてみましょう。

会場：熊本県松橋収蔵庫
〒869-0524 熊本県宇城市松橋町豊福1695 Tel: 0964-34-3301
メールアドレス：shuuzouko_kumamoto@yahoo.co.jp
HPアドレス：http://www.pref.kumamoto.jp/site/shuuzouko/
期間：平成24年6月15日（金）～8月31日（金）
10:00～17:00（日曜、祝日は閉館）

入場無料

松橋収蔵庫ミュージアムパートナーズクラブがスタートしました

松橋収蔵庫ミュージアムパートナーズクラブは、県民のみなさんが主体となり、松橋収蔵庫の資料や設備等を活用して、県内の自然や文化について自ら学んでいくクラブです。5月19日（土）に設立総会が開かれ、「草木染めの会」「植物調査会」「野鳥研究会」など、7つのクラブが活動をスタートしました。

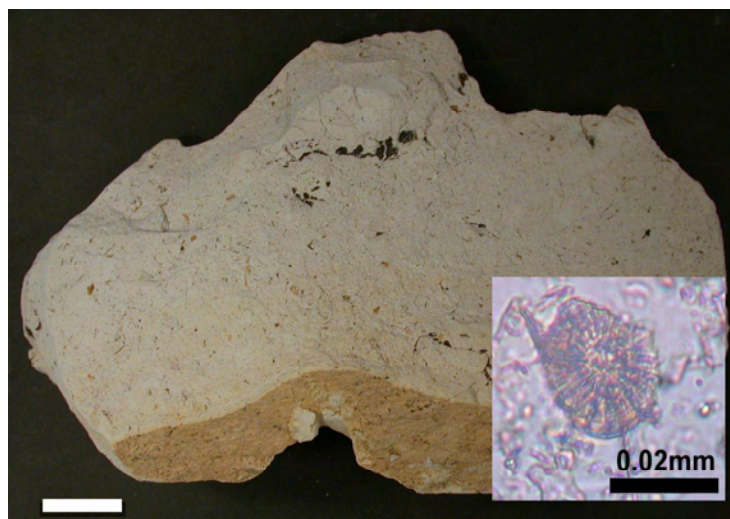
熊本の自然や文化についてもっと学んでいきたいというみなさんの参加をお待ちしています。詳しくは、ホームページをご覧ください。



No. 105
地 学 珪藻土

珪藻土は、珪藻の化石を90%以上含む土や軟らかい岩石です。珪藻は、淡水から海水まで幅広い環境で生息している非常に小さい単細胞の藻類で、二酸化ケイ素でできた2個の硬い殻を持っています。殻には細かな凹凸模様があり、珪藻土中に隙間を作ります。多孔質で密度が小さく、軽くて断熱効果が高く、加工がしやすい珪藻土は、昔から壁土や七輪の材料として使われてきました。現在でも保温材、フィルターの一部に使用されてます。また、粒子が細かいため、研磨材などにも利用されています。

写真の標本は、人吉市鹿目町の鹿目の滝の1kmほど上流で採取された珪藻土です。人吉層という約250万年前にできた湖の堆積物に含まれています。人吉層は泥岩を主体としており、凝灰岩や砂岩、珪藻土の層を挟んでいます。標本採取地一帯は、河床に灰白色の珪藻土が露出しており、炭化した植物の葉の化石を含んでいるのが見られます。写真の標本にも植物の葉の化石が含まれているのが見られます。（廣田志乃）



珪藻土と珪藻土に含まれる珪藻化石の顕微鏡写真
珪藻土のスケールは2cm

No. 106
民 俗 火熨斗とアイロン

火熨斗は洗濯後の衣類のしわ伸ばしや裁縫の仕上げに使われた、柄杓のような形をした道具です。平安時代には同じものが蒲団を温める道具として用いられていましたが、江戸時代には衣類のしわを伸ばす道具として広く使われていたようです。火のついた炭を入れた金属製の容器を布に押し当て、熱と容器の重みによって布のしわを伸ばします。容器の底は平らですがやや丸くふくらんでおり、布の上を滑りやすくなっています。

現在、私たちが使っているアイロンは、幕末頃に西洋から伝わったアイロンが進化したものです。このアイロンも炭を用いました。明治中頃には国産の様々なアイロンが作られ、洋服の普及とともに広まっていったようです。昭和30年代までは、火熨斗も炭を用いるアイロンも、まだ一般的に使われていました。しかし、いつでも手軽に使えて温度調節ができ、火の粉や灰で衣類を汚す心配のない電気アイロンが普及すると、どちらも使われなくなりました。（迫田久美子）



八代市東陽町河俣 ～昭和初期 38×12×7cm



玉名郡和水町江田 ～昭和初期
17×10×17cm

No. 107
動 物 ヒミズ Urotrichus talpoides モグラ目モグラ科

ヒミズ（写真1）は、全長11～15cmほどの日本固有の小型のモグラ科の一種で、本州・四国・九州の低山帯の草地や低木林に生息しています。黒褐色の毛を持ち、尾は胴体の3分の1の長さがあり棍棒のような形をしています。また、地中での生活に適応して耳介がなく、目はとても小さくなっています（写真2）。土の中にトンネルを掘って暮らす完全な地中生活のモグラと違い、ヒミズは腐葉土や落ち葉の下などで、昆虫や小型のミミズなどを食べて生活しており、夜には地表を歩き回ることもあります。このような生態から、日不見（ヒミズ）という和名が付けられました。

また、日本にはよく似たヒメヒミズも生息しています。ヒメヒミズは、ヒミズのいない高山帯の岩場に生息しています。こちらは熊本県でも発見例が少なく、レッドデータブックくまもと2009に絶滅危惧ⅠA類に選定されています。（稲垣玲弥）



写真1

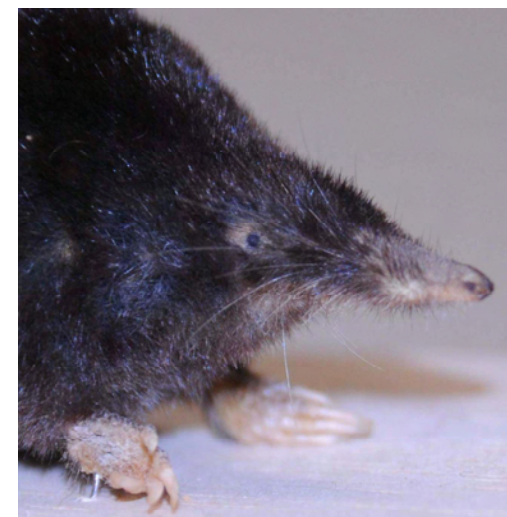


写真2

No. 108
歴 史 熊本市辛島家資料「会約」

江戸時代の教育施設の一つである家塾は、藩の要請によって、藩士の教育のために設置された私塾であり、藩校と共に、藩の人材育成を担う重要な教育の場でした。

本史料は熊本藩の藩校時習館第4代教授であった辛島才蔵（塩井）の家塾における規則を定めた「会約」です。

内容は、読書・会読以外の私語を禁止すること、酒を禁止すること、掃除をしっかりと行うこと等があげられており、現代の校則にも通じる規則であったことがうかがえます。さらに、文化11年（1814）から天保10年（1839）まで、約160名の塾生の入門年月日・氏名・出身地等が記載され、熊本藩士に限らず、人吉・肥前佐賀・筑前秋月等他藩からの入門が多く見られます。また、史料中には、「覚」として机・屏風等の備品が記され、「官府より相渡居候分」とあることから、藩から備品が渡されており、家塾の設営に藩の援助があったことが分かります。江戸時代の学生が、生活を共にしながら勉学に励んだ家塾の様相を知ることができる史料です。（松本晃世）

